

人交フオ-ラ 21

2004.8



CONTENTS

- | | | | |
|---|-------------------------|----|------------------------|
| 1 | 巻頭言 新たな10年に向けて | 7 | 大学院の窓 |
| | 人文学部長 桑原 俊一 | 8 | 新任教員紹介 |
| 2 | ボランティア日本語教室奮闘記 | 10 | 研修旅行 新たなスタート |
| | 熊本 藤香・松島 宏美 | 11 | 「研修旅行の思い出」 |
| | 高根 京子・南谷さやか | 15 | 研究、その足跡 |
| 4 | 「さいはて」を生きる力 | 17 | 人文学部第8期生 卒業論文・卒業研究題目一覧 |
| 6 | ゼミ室紹介 1部 日本文化学科・野坂ゼミナール | 21 | 編集後記 |

北海学園大学人文学部

巻頭言

新たな 10 年に向けて

人文学部長 桑原 俊一



船岡先生の任期満了に伴い学部長に就任しました。諸先生方、事務職員の皆様さらに関係各位のご協力をいただきこの重責を果たしてまいりたいと思っております。

人文学部は平成5年の開設以来10年が経過し、創設期の諸先生方4名をお送りしたところです。菱川先生（日本近代文学等）、千葉先生（外国における日本研究等）、村山先生（日本文学概論等）、故池田先生（日本文化論等）は、開設時の理念と趣旨を高く掲げ、「北海学園大学人文学部」が北海道を新たな人文学の発信基地にしたいと奮闘し、その礎となりました。長く英語教育を担当された外国人教師エイジ＝スエナガ先生とポール＝ワード先生は本国に帰国されました。

また新たな先生方をお迎えしました。^{やすかた}安酸先生（ヨーロッパ文化論等）と^{くんし}郡司先生（日本文化論等）、そして英語教育に携わる外国人教師として、イアン＝マンビー先生とブリック＝ゼフ先生です。新たな活力を吹き込み学部必不可欠な力となって下さると確信しています。

季節が移り変わるように、時代の要請も日々変化しています。学部は現況にどのように向き合っていくべきなのでしょう。対処の仕方が問われているといいでしょう。

新たな節目の時を向かえ、開設当初の設置の趣旨に賛同した道内財界、企業から寄せられた期待にどれほど応えられたか検証を迫られているようにも思います。

大学における教育問題が俎上に載るとき必ず求められるのは確かな経験に裏づけられた対話と成熟した議論を基本にし、じっくりと今日的知的課題を掘り起こしていく作業だろうと思います。

第一に私たちは人文学部開設当初の原点に戻って現在を的確に把握し、原点からの10年の理念を継承しつつ、達成できたものと、改善すべきものを十分議論していく勇気が求められていると思っています。

今年度第8回卒業生（日本文化学科、142名と英米文化学科、131名）を送り出しました。人文学部で培った知性と好奇心をもって、今後は社会の第一線で活躍してくれるものと期待しています。

この春日本文化学科に164名、英米文化学科に158名の新入生を迎えました。ドイツの文豪ゲーテは晩年『イタリア紀行』を著わしますが、1775年、ワイマールに移住してからイタリア旅行（1786年）までの十年間の生活は、ゲーテにとって、作詩活動の面で最も困難な時期でもありました。イタリアに早くから憧憬を抱いていた彼は、現況の行きづまりを打開し、人間として新しく生まれ変わろうと決意します。

学生諸君にとってこの大学と学部が提供する知的刺激と作業とが諸君の新しい個性と人間創造のかけがえの無い場所であってほしいと願います。

ボランティア日本語教室奮闘記

熊本 藤香 (英米文化学科 2004 年卒) 松島 宏美 (日本文化学科 2004 年卒)

高根 京子 (英米文化学科 4 年在学) 南谷 さやか (英米文化学科 4 年在学)

企画：中川かず子 (日本文化学科教授)

日本語ボランティア「たんぼぼ」は、女性センター日本語講座として 1993 年に発足して以来札幌の在住の外国人を対象に日本語教室を開講していますが、数年前から TA（アシスタント）として北海学園大生も活動に参加しています。日本語教師を目指している私達にとって、実際の現場に携われるというのは願ってもいないことで、大変なこともあります。楽しく活動しています。今回、仲間達とともに、教室の様子や実習体験について感じたことを報告させていただきます。

ボランティア教室では、実際に教えるとはどういうことか、それを学ぶことができます。以前、学習者から「東京へ行く」と「東京に行く」の違いを尋ねられたことがありました。大学の授業で習った知識はあっても、日本語を学び始めたばかりの学習者に説明をするのは簡単ではありません。大学では日本語教師として必要な日本語の知識を得られますが、実際に教える技能の獲得まではいきません。「たんぼぼ」で実際の授業に参加するうちにそれが少しずつわかってきました。

学習者のレベル・興味などを考えながら授業

を組み立てるということは予想以上に大変なものでした。学習者の国籍は実に多様で、職業や家族構成、日本語のレベルも様々なので、ニーズも習得度も異なります。綿密な授業計画を立てても学習者に理解されないこともあります。また、実際の授業では予想もしていない展開があります。注文する方法を教える時に、学習者から突然こんな質問がありました。「おそばやさん」「そばや」と同じですか？」「なぜ“さん”をつけるの？」「や」は何ですか？」—あら、どうしようかな……“新米教師”はしばしば答えに窮してしまいます。

ボランティアを始めてから、自分達の大学の授業に対する態度に変化が現れました。教えた経験のない時に聴く授業と実際に教え始めてから聴く授業では、講義内容が同じでも感じ方や自分の中への吸収の仕方が全然違うのです。これからは大学で得た知識を単なる知識で終わらせるのではなく自分でしっかり消化して、実践でも役立つようにしていきたいと思います。

こうした経験から、外国語（日本語）の授業をする上で最も大切なことの一つはクラスの雰囲気作りだとわかりました。学習者の国や年齢、文化の違いなど様々な差を越えて勉強しや



すい環境を作るのは容易ではありませんが、学習者を授業に引き込む力が教師の腕の見せ所なのだと強く感じました。全員が教師に集中してクラス全体が一体となっている授業は学習者が生き生きして本当にいいクラスだと思います。日本語を教える中では、失敗も沢山ありますが授業が終わった後に学習者から拍手をもらったり、「ありがとう」と声をかけてもらえるとう大学の授業では味わえないような充実感があります。きっと学習者からの優しい言葉や感謝の言葉にも支えられながら授業をしているのだと思います。授業の準備などで大変な時もありますが、そういった苦労を全て忘れてしまうくらい嬉しいことが沢山ありました。そういう気持ちを味わうためにも学習者に喜んでもらえるような授業ができればいいと思います。

日本語の教え方以外の収穫も多かったです。教室の内外で様々な文化に触れる機会が増え、私達の価値観とは違う考え方を知ることができました。ここでの体験は異文化理解の態度や能力の育成に役立つことと思います。ボランティア日本語教室は大学の授業で学べない多くのことを学ばせてくれます。まさに、日本語教師の生きた教育実習の場となっています。

地域と大学のこうした連携、ネットワークができていることは日本語教師を目指している学生にとって大変ありがたいことで、活動に参加させていただくことは得るものが多く勉強になります。そしてまた地域社会の外国人支援に協力できていると考えると大変嬉しく思います。日本語を学びにくる学習者は日本の社会に溶け込んで生活したいと願っています。私達が日本語教室で教師としてボランティアすることは、学習者が日本語を上達させて地域社会に適応していくための支援をしていると言えます。このような機会を与えてくださった先生方と快く受け入れてくれた地域の日本語ボランティアの皆さんに感謝しています。私達はまだまだ未熟で、今はまだ学習者と一緒に学んでいるといった状況ですが、いつか日本語教師として一人立ちしたら必ずこの経験は生かされると思います。その日が1日も早く来るよう、たんばぼでの実習の機会を大切にしっかりと教育能力を身につけていきたいと考え、今日も日本語教室で奮闘しています。

「さいはて」を生きる力

土屋 博

昨年度就職委員として企業訪問の行き先を決めるにあたり、私はちゅうちょなく土別・稚内方面を選んだ。なかなか日程がとれなかったため、3月初めにずれこんでしまったにもかかわらず、さすがにこの方面へはまだ誰も足を運んでいなかった。あとから聞いたところによると、これまでの訪問回数もあまり多くないようである。しかし、吹雪模様の道北の旅は、私が本学を理解するために、きわめて貴重な経験であった。

まず土別へ向かう列車の中で、かつて講演に招かれたことのある某宗教団体の名寄教区長とばったり出会ったところから、旅は始まった。さすがに地域に根ざした活動をしているだけあって、社会・経済情勢をめぐる彼の話は大いに参考になった。午後に降り立った土別の街並が、予想以上に活気を失っているように見えたときにも、その予備知識があったので、さほど驚くことはなかった。駅前ですら店はほとんど休業同然の状態であり、訪問すべき企業もすぐには見あたらない。やむをえず最初から市役所と信用金庫を訪ねることにした。そこには本学の卒業生も何人かおり、土別では例外的に恵まれた職場であるが、遊ぶところがあまりないと

いうことは、やはり若い人たちにとっては不満の種になるようである。地域産業の振興がどのようにしたら可能になるのかを考え実践することが、さし迫った課題になっている。

土別に比べれば、稚内にはまだしも人の動きがある。しかしここでも、繰り返し聞かされたことは、市町村合併にともなう諸問題や公共事業縮小によってもたらされる影響のことであった。特にいくつか訪問した建設業や水産業は、きびしい環境におかれているように見受けられた。入口まで行ったが、正式に訪問して話を聞くことを遠慮した企業もある。各所で用いられる「さいはて」というやや自虐的な言葉、がらんとした商店街で風に吹きさらされるロシア語の看板などが、この感覚をさらに増幅している。稚内駅からさほど離れていない繁華街で2002年に発生した大火の焼跡が、一軒のラーメン店を除いて空地のままであることも、新しい展望の難しさを象徴しているように見える（写真参照。これは当時たまたま滞在していた写真家による珍しい報道写真である）。

しかしこうした状況であるにもかかわらず、否むしろ、それなるがゆえにこそと言った方がよいのかもしれないが、稚内で出会った本学の



卒業生はきわめて元気であったし、また評判も上々であった。ちなみに、この写真を下さった駅案内所の女性のご子息も本学の卒業生で、関西方面でご活躍とのこと、うれしそうに語っておられた。北海道経済沈滞の逆風をはねかえすべく、「さいはて」を生きぬくということは、口で言うほど簡単ではない。しかし本学には、さほど肩ひじをはずし、さりげなくそうした課題を引き受けていく気風が残っているように思われる。地域への貢献とは、こういうことの積みかさねにほかならない。

(英米文化学科教授)



ゼミ室 紹介

1部 日本文化学科 日本近代文学ゼミ・野坂ゼミナール（3年）

ゼミ生：

大井康匡、小林明美、多田小百合



このゼミは1・2部ともに三年次の段階では、日本近代の文学作品を詳細に〈読む〉こと、自分の〈読み〉を資料を作成して発表すること、そして作品と発表資料に基づく討論の実践的訓練、四年次においては卒業論文・卒業研究作成の指導を行っています。どちらも実際に始めてみるとなかなか難しい問題があって思うようにはいってないのですが、ここでは、たまたま少人数のゼミになっていて、いまのところはうまく展開している1部日本文化学科の三年次の様子を紹介することにします。まず学生の声を用いてみましょう。

「ゼミでは主に『近代の短篇小説』を読み、それぞれの作品について発表資料を作成し、それについて全員で意見交換などを行っています。学生が三人と少ないため、大変な部分もありますが、毎週楽しく授業を受けています。」

「このゼミは学生三人と超少数制で、発表回数が少し多かったり、発言も多くしなければなりません。でもその分集中して取り組むので90分は本当にあっという間に過ぎてしまいます。雰囲気もこじんまりとアットホームで楽しく、案外と気に入っています。」

「最初は僕に同情していた友達も、今は僕をうらやましいという。『同じ作品を読み、意見を交換し、ぶつけ合い、尊重するんだ。三者三様の見解に、先生は決して評価を下さない。はっきり言ってゼミは充実しているよ』いいなあ友達に言った。」

これを教師の側から言い直すと次のようになります。

各自が担当する作品をいろいろな角度から読んで、発表資料を作成して報告する、ここまですぐ大切な準備段階で、それをちゃんとやらなければ何ごとにも始まりませんが、演習の時間は、それに基づく討論あるいはレジュメの解体の場です。参加者の感性、理解力が試される場でもあります。ときに教室の空気が動きはじめることがあります。たとえばある日のゼミでは〈想像を膨らませて言えば〉ということばが飛び交い、そこで出された意見は、長年その作品に馴染んでいる私が一度も思いつかなかったものでした。これは〈読み〉につれてそれぞれの個性が立ちあらわれてくる現象、すなわち作品にその場で生命が与えられるということでもあります。（野坂幸弘）



大学院の窓

文学研究科日本文化専攻は、開設時よりの中心であった池田英俊教授が2月4日に病没、3月に菱川善夫、千葉宣一、村山 出の3教授が退職されたことで、新しい時代にはいりました。菱川、千葉、村山の3教授は、『近代文学の美と思想』、『モダニズムの比較文学的研究』、『万葉集と大陸文化』というきわめて個性的な科目を担当され、大学院の存在を内外に知らしめていました。しかし、かかる個性的科目はカリキュラムとして充足することは困難です。そのため日本文化専攻では、科目名称の見直しを行い、平成18年度より下記ようになります。この変更は、学部教員の大学院担当を視野にいれ、大学院の拡充を図らんとしたものです。

日本文学特殊講義、同演習 Ⅰ、Ⅱ、同講義Ⅲ―Ⅴ
比較文学特殊講義、同演習 Ⅰ、同講義Ⅱ
日本歴史文化特殊講義、同演習 Ⅰ―Ⅲ、同講義Ⅳ
日本宗教思想特殊講義、同演習 Ⅰ、同講義Ⅱ
日本言語文化特殊講義、同演習 Ⅰ、同講義Ⅱ―Ⅳ
アイヌ文化論特殊講義、同演習
北方文化論特殊講義 Ⅰ、Ⅱ
アジア文化論特殊講義 Ⅰ、Ⅱ

英米文化専攻では、博士課程を平成17年度より開設すべく、安酸敏眞（今年度着任）、大塚秀之（来年度着任予定）の2教授を補充しました。文学研究科は、英米文化専攻博士課程の開設により、ここに両翼がそろい新しい飛翔の場を整えたこととなります。

研究科では、日本文化、英米文化両専攻の世代交代に備えるべく、研究科担当教員のみならず、大学院担当に相応しい研究・教育業績の有無を全学部教員を対象に審査をなし、独立行政法人大学評価・学位授与機構等の審査に耐えうる大学院としての足場を固めたく思っています。

研究科の充実には、教員が自覚的に研鑽に励むのみならず、院生指導の充実が欠かせません。そのため全体ゼミを設け、論文構想の中間発表の場としました。また、院生の論文発表誌『日本文化研究』の学問的質を高め、英米文化専攻の投稿を可能にすべく、今年度より誌名を『年報 新人文学』となし、編集委員会の下で投稿論文の審査制度を設け、院生、教員の研究成果を広く内外の学界の問えるように研究活動の体制を整備しております。

大学院入試は入試科目の見直しをしました。修士課程の一般受験者は専門科目、口述試験、外国語。外国語は英語。外国語については、フランス語、ドイツ語等の旧来型の外国語試験でなく現状を踏まえた入試科目としたわけです。ただし、外国人留学生には日本語での受験をみとめます。また、社会人特例による受験者には外国語の試験を課しません。

博士課程は専門科目と口述試験。修士論文を提出のこと。

（文学研究科長 大 濱 徹 也）

新 任 教 員 紹 介

新人文学の形式



安 酸 敏 眞

新年度から英米文化学科の一員となった安酸敏眞です。生まれも育ちも鳥取県米子市ですが、18歳で郷里を離れ、10年間京都大学で学びました。入学したときは工学部の合成化学科の学生でしたが、途中で文学部哲学科に編入し、それ以後ずっとキリスト教学をベースにした西洋思想史の研究に従事しています。28歳のときアメリカのヴァンダービルト大学大学院に留学し、さらにドイツのゲッティンゲン大学でも学びましたので、トータルで15年間の学生生活を送ったことになります。帰国後、2年半は東京の日本生産性本部で嘱託職員として働き、その後盛岡大学で5年半、そして1993年から11年間、埼玉県上尾市にある聖学院大学で教鞭を執ってきました。この間ずっと盛岡と大宮の間を毎週新幹線で往復していましたので、JR東日本には相当の貢献をしたはずですが、今回このような流浪生活にピリオドを打って、永住する覚悟で札幌に引っ越してきました。

研究としては、これまで20世紀初頭の神学者・哲学者として名高いE.トレルチと、18世紀ドイツ啓蒙主義の代表的著作家G. E. レッシングについて原典研究を行ない、目下は宗教改革期の靈性主義者セバスティアン・フランクと取り組んでいます。この一連の研究はいずれ13世紀のフィオーレのヨアキムにまで遡る予定です。こうした西洋思想史の研究と並行して、いわゆる京都学派の哲学者たちの研究にも密かな情熱を燃やしていますが、こちらはまだ仕込みの段階です。

研究者として常日頃心掛けていることは、発信機能をもった人文学の確立ということです。我が国の人文学は従来、欧米の学術成果を輸入することにのみ熱心で、自然科学の世界ですらに常識となっている、欧米の学者と同一レベ

ル・同一歩調での研究ということを見てきたように思います。そこには言語の壁が大きく立ちはだかっていたことは事実ですが、グローバル化が進むこの時代に、もはやこれまでのような鎖国主義的なあり方は許されません。その意味で、新人文主義を標榜する本学人文学部から、新しい人文学の潮流を形成していきたいと考えています。(英米文化学科・教授)



読書について

郡 司 淳

もう二十数年も前のことです。大学4年の卒業論文の中間発表のさい、私がレジューメに掲げた参考文献について、当時の指導教授から、「きちんと読んだのか」と問われたことがあります。私が関連する部分のみ拾い読みした旨答えますと、即座に、「本というものは始めから終わりまで読まなければ駄目だ。漢字が読めなかったり、語句の意味の分からないときには漢和辞典、国語事典を必ず引くように」と怒鳴られました。よく怒鳴る先生でした。

ただ私も、同級生のなかで読書量については劣っていないと自負するものがあっただけに、そのおしかりの言葉に内心期すものがありました。要するに「やってやろうじゃなか！」という思いです。

それから、漢字はもとより、語句なども一々口で出して意味を言ってみて、あやふやな場合には辞書を引いて調べました。そのようにして本というものを読んでみると、これまでほとんど雰囲気読んでいたこと、実際にはただ文字づらを眺めていたにすぎないことを思い知らされました。なかなか頁が進まず、「薄い本にしておきゃ良かった」などと舌打ちしながら、最初の一冊を読むのに、とうとう二カ月位かかりました。

外国に滞在して、ある一定期間が過ぎると、言葉がスラスラ出てくるという話をよく聞きま

す。読書に関して、私もこれと同じような経験をしました。思えば、あの夏休み以来ずいぶんと時が過ぎていましたが、そのおりの、文章というものが、身体の隅々にまで染みわたるような感覚は現在でも忘れることができません。

ちなみに読書には音読や黙読、乱読などのほかに、ツンドク（積んでおくの意）というのがあります。新任の挨拶に代えて、研究室で自分の書架を眺めながら、今後の自戒としてこの文章を書いた次第です。（日本文化学科・助教授）



A Californian

Bricklin Zeff

I'm from Southern California. I grew up in the Los Angeles area and graduated from the University of California in Santa Barbara in 1987. My degree is in Liberal Arts with a major in Philosophy and Religion. I came to Japan because I was interested in the Japanese culture. My interest in Japan goes back to my junior high school (middle school) days. I discovered a novel where the main character grows up in Japan and plays GO. This novel first sparked my interest in things Japanese. I started playing GO because of that book. Then in university, I became very interested in Zen Buddhism and Shintoism. While during work for my Philosophy major I came across the *Kojiki* and the Genjokoen. At that point I decided that when I finished my degree, I would travel to Japan.

I love living here. I am very much an outdoor person. I even took a wilderness survival course when I finished high school. I love camping and hiking and most outdoor sports. I am a good tennis player. I have been playing for 30 years. I also am a surfer. I discovered good waves here in Hokkaido about 12 years ago and I have some good friends that I go surfing with every summer.

I have been married for three years and I

have a son. His name is Jake, and he's twenty months old. Once a year we take him to visit his grandparents in California. We try to encourage him to speak English at home. He is picking up vocabulary from both languages so quickly. It is very exciting for me both as a father and as a linguist.

（英米文化学科・講師）



An Englishman in Sapporo

Ian Munby

It truly is a great honor, privilege, and pleasure to be welcomed aboard the Hokkai Gakuen University ship as a new teacher. While I look forward to the coming years of this new voyage, I shall look back on the years leading up to this appointment as a different kind of voyage. In brief, I was born in a village near Brighton, UK, but spent the first three years of my life on the island of Borneo where my father worked for Shell. I have one half brother, Hugh, who is seventeen years older than me. He left Southampton on a boat for Canada when I was 5, and never came back. We are a close family, but after graduating St. Andrew's University in Scotland with a Masters degree in French, I found myself heading for Spain to teach English, and thereafter to Japan where I have been a happy resident for the last eighteen years. Coming to Sapporo in 1988 was like arriving in paradise after two hectic years in Tokyo. I now call Sapporo my home and time now flies as my wife and I are busy raising our one princess and two Taros. When I can escape the house, I love to go camping, fishing and swimming with the family, but my favorite free time activity will always be cross-country skiing. For the moment, however, I am hoping for a long hot summer!

（日本文化学科・講師）

研修旅行 新たなスタート

8年間続いた日本文化学科・卒業研修旅行は、今年より授業科目としてカリキュラムに組み込まれ、「日本文化演習」となりました。日本文化演習では、昨年までの卒業研修旅行と同様に関西方面へのフィールドワークが実施されましたが、そのみならず、事前指導として数回の講義も行われました。

第1回目の日本文化演習には、36名の学生諸君が参加しました。引率には追塩千尋、大瀧徹也、中川かず子、村山出の諸先生と大石和久が当たりました。日程は2月23日（月）から2月28日（土）までの5泊6日を予定していたのですが、出発当日、大雪のため新千歳から予定していた飛行機が欠航となるというハプニングがあり、そのため出発を一日延期し、日程を1日短縮せざるをえませんでした。この点は残念でしたが、関西に着いてからは天候にも恵まれ、さしたるトラブルもなく、無事研修を終えることができました。

卒業研修旅行は日本文化演習へと生まれ変わったわけですが、古都の地を踏みしめながら、いにしえへと想像力の翼を広げつつ、日本文化についての理解・関心を身をもって深めてゆくといった研修旅行としてのあり方は、よき伝統として引き継がれているように思います。紙幅の都合上、すべてを掲載するわけにはいきませんでした。本紙に掲載された紀行文は、そんな日本文化演習の生き生きとした体験記となっています。

（日本文化学科 大石和久記）

2月24日(火)	新千歳空港（8：00）→伊丹空港（9：55） 大阪・滋賀団体研修：国立民族学博物館→三井寺→大津歴史博物館
2月25日(水)	自主研修
2月26日(木)	奈良団体研修：秋篠寺→平城宮跡・資料館→奈良国立博物館→ 元興寺・極楽坊収蔵庫→史跡・頭塔 ※団体研修後、宿泊ホテルにて熊倉功夫・国立民族学博物館教授による講演会
2月27日(金)	京都団体研修：京都御所見学、その後自主研修
2月28日(土)	伊丹空港（15：00）→新千歳空港（16：45）

「研修旅行の思い出」

2702118 え さし か ゆかり
江 刺 家 紫

日本文化演習は初日から吹雪に見舞われ飛行機が出発出来ず、千歳で一泊するという幸先の悪いスタートだったが、その後の行程はなかなか順調だったように思う。

その中でも一番記憶に残っているのが自主研修初日となる三日目の出来事である。一人で回る為、細かな予定を立てて挑んだので完璧……のはずだった。まず比叡山にバスで行き、ロープウェイと叡山電車経由で鞍馬山へ。その後横道を通して貴船神社へ行き、叡山電車で帰ってくる。というものであった。その予定通りバスの時間に合わせて10時頃にホテルを出るつもりだったが、早起きをしたので下見も兼ねて8時にホテルを出た。歩くこと30分、出町柳駅に到着。先に叡山電車の切符を購入しておこうと窓口の女性に尋ねる。すると、「比叡山のロープウェイは今日から3月5日まで運休で叡山電車経由では行けない」と告げられる。いきなり出鼻を挫かれてしまった。ショックで「……なんで今日からなんですか」と思わず聞いてしまい嫌な顔までされた。でもまあ旅に不測の事態はつきものである。その上私の計画したコースとなるとこの程度のトラブルはあって当然のようなもの。比叡山は時間を合わせて行きも帰りもバスということにすれば今日回れないこともない。早く出てきた私は何て運がいいのだろう。ああ、危ないところだった。ラッキーラッキー。と、思うことにした。頭の中で素早く予定を立て直し、先に鞍馬と貴船を回ることにする。「鞍馬の方に先に行くんで、やっぱり切符下さい」と元気に購入。すると、「お客さん、貴船にも行くんですか」と聞かれる。私はまた元気に「はい、どうせなんでそっちにも行こうかと思ってます」と答えた。頭はもう寺と神社で一杯だ。が、「鞍馬山から貴船に抜ける道、今工事していて閉鎖中ですよ」とさりと告げられる。……この人私が嫌いなのだろうか。と一瞬本気で思った。が、彼女の所為ではない上に親切で教えてくれているのだ。恨むのはお門違いだ。と、気を取り直す。抜け道が通れないとなると、鞍馬山を登って降りて電車に乗って貴船神社までの坂を登って降りるという方法でしか回れない。歩く距離が倍近くになってしまう。が、ここで引き下がったら女が廃る。昔の人は皆歩いたものだ。電車あるだけましと思え。ああ、なんてラッキーなんだろう私は。と無理矢理思い直すことにした。そして時間がもったいないので早々に電車に乗り込み鞍馬山へと旅立った。

鞍馬山に着いた私はあまり時間もないのでサクサク上を目指すことにした。時刻は9時を少し回ったところ。入り口には三、四人程度しか人がいない。写真を撮りたかった私は好都合とばかりに軽い





足取りで登って行った。が、人が本当にいないというのは凄く怖い。という事実ですぐに気が付く。薄暗い山の中、一人歩くということのなんと心細いことか。坂は滑りそうだし、マムシに注意とか書いているし、人もいないのにガサガサ音がするし……。人より幾分（大分）小心者の私は賽銭箱のあるところ全てに小銭を投げ入れ、「無事に帰れますように」と祈ったのだった。持っていた小銭の多くは百円玉だったので私は多分ここで二千円近く使ってしまっただろう。だがこうして今無事に過ごしていることを思えば決して高くはないはず。きっと……。そうして一つ一つにお参りをして時間を結構使ったためか、鞍馬寺に着く頃には修学旅行生など参拝客がちらほらいてほっと一安心。「鞍馬山の神様が守ってくださったので無事でした。ありがとうございます」と普段思いもしないことをしみじみと思った。それだけ小心者だったと言えはその通りなのだが、自然の驚異（？）に晒されると「神に祈ったので大丈夫」とでも思っていないと怖くて進めないのだ。昔の人が神様を信じていた気持ちが少し実感できたようだ。

帰りは時間もないので鞍馬山内のケーブルで降りることにした。私が一時間かけて登った道を二分で降りる。しかも料金はたったの百円。ちょっぴりショックを隠せなかったがお金で買えない価値を得たと思うことにしてさっさと下山して次へ向かった。

電車を貴船口で下車すると、そこから貴船神社までは坂一本道。車道用に舗装された道には誰も歩いておらず、車も時々通るだけ。春になれば循環バスが走っているそうだが今はない。片道25分程度



と書いてあるが、歩いていて一体今自分がどこにいるのかが酷く分かりにくい。幸い鞍馬山よりはなだらかな道だったので寂しさを紛らわせる為歌を口ずさみながら歩いた。やっぱり小心者である。貴船神社に近くなると少し宿やお店などが出ており、地元の方と挨拶を交わし、孤独感が薄れてきた。本社参拝後、結社、奥社にも参拝予定だったが、比叡山行きのバスに間に合わないので断念。何せ比叡山行きのバスは一日に三本。行ったバスがそのまま折り返して戻ってくるから、最悪二本目のバスに乗らないと中を見て回ることが出来ない。貴船神社参拝記念にせめてもと、水占いをしてみた。水占いというのは、おみくじになっている一見ただの白い紙を購入し水に浮かべると、文字が浮き出てくるといものである。が、その紙というのがなかなか丈夫な代物でいつまで経っても文字が浮き出ない。間違って普通の紙を買ってしまったのではないかと思いつつ待つこと5分。浮かべるといふ決まりだがもういい加減沈めてしまおうかと思ひ紙に手を付け、はたと思ひなおし日に透かす。

『中吉』

成るほど。やはりこの紙はただの紙ではなかったようだ。貴船神社の思い出も作ることが出来たし、今日残すところは比叡山のみ。気分を入れ替え元気に来た道を引き返し電車に乗った。

途中観光客に道を聞かれるというアクシデントも乗り越え、無事に比叡山行きのバスに乗り込んだ。バスに揺られること1時間強、ついに比叡山に到着。前日に皆と園城寺に行ったので、これで山法師も寺法師も両方見られるなあ。と意気揚々としたが、やはり人がいない。バスの中にもお客が5人程しかおらず嫌な予感がしたが、又も寂しいところに来てしまったらしい。外より寒い国宝館には私と入り口におじさんとおばさんの三人。何て危ないのでしょうか。その気になったらこれ盗めますよ。他の階誰もいませんよ。重要文化財ですよ。いいんですか。と思いながら色々見て回る。各階に一人くらい係員を置くべきではないかと思う。

そこを出て東塔を見て回る。国宝の根本中堂に有名な不滅の法灯も見ることが出来、上機嫌で東塔を出る。そして西塔へ向かおうとして道に迷った。幸いにして近くを工事のお兄さんが通りかかり、道を尋ねると「それならバスで行ったほうがいい」と入り口の方のバス乗り場への道を教えてもらった。一日中歩きっぱなしで足も痛くなってきたしそいつは有難いとバス乗り場へ行くと「今冬だから運休ですよ」と告げられた。……悪気はないのは分かっているけど。足、そろそろ限界です。帰りの



バスの時間もあるし、今から戻って歩いて西塔に行くのはちょっと厳しい。諦めようかと思った。が、ここで引き下がっちゃあ何のためにここまで来たのやら。横川の方へは流石に片道1時間半と書かれているし、帰れなくなって比叡山で一夜明かすのは絶対避けたいので諦めるとして、西塔くらい行かなくてどうする。と、気持ちを奮い立たせて向かうことにした。西塔への道は雪も残る寂しげな道で、参拝客の姿は全くない。登ったり降りたり道はどこにいるのか分からなくなる。今日一日そんなところばかり歩いていた私だってやっぱり怖い。またも神頼みを続け先へ進む。途中掃除中のお坊さんに会うが、「なんで今時期にこっちに人が……」といった顔をされる。参拝客は本当にいないのか、受付（本当はここでチケットを見せなくてはならない）にも人がいない。もしかして、閉まっているのだろうか。そんな嫌な予感もしたが、頭の隅に追いやる。そしてついに西塔到着。中に人が独り。ほっと一息。「車で来たんですか」と聞かれ「歩いて来ました」と答えた。「バスで来たんですか」と聞かれ「動いてませんでした」と答えた。もう何も聞かれなかった。もしかして凄惨なところに来てしまったのだろうかと不安になり、身体お守りを買って戻った。無事に帰ることができたのでご利益はあったようである。帰りのバスに乗り、東京から来たというお話好きのおばさんに付き合い、体だけでなく心もぐったり疲れてホテルに戻った。なかなか充実した一日を過ごせたように思う。

右も左も分からない土地で、自分一人で予定を立てて見学していくというのは今まで経験したことのないものだった。いつも個人旅行でも誰かと一緒に回っているので、心細かったけれど気負いがなくいい経験になった。普段見ることの出来ない貴重なものも見ることが出来たし、この旅行で得たものは大きいと思う。最初は不安だったけれどこの旅行に参加して本当に良かったと思った。



■学会・研究発表

岩崎まさみ “The First Impact Assessment of a Development Project on Ainu”, 4月、国際影響評価学会、カナダ、バンクーバー◇「アイヌの生態環境知識の再構築」、5月、立命館大学国際言語文化研究所主催春季企画、連続シンポジウムテーマ「先住民という言葉に内実を与えるために」、立命館大学◇「イヌピアロイトによる海洋資源共同管理」6月、日本文化人類学会第38回研究大会、東京外語大学

須田 一弘 「開発を待つ村、送金を待つ村—PNGとトンガの事例から」3月23日、佐賀県嬉野温泉和多屋別荘、日本オセアニア学会第21回研究大会シンポジウム「南太平洋の商品価値—開発と経済的自立への道」

常見 信代 「ブリティッシュ・ヒストリとナショナル・ヒストリー—中世スコットランドの場合」3月15日、中世ブリティッシュ・ヒストリ研究会、熊本大学◇「スコットランドの国文書に見る‘Racial Address’」5月21日、中世ブリティッシュ・ヒストリ研究会、東北大学

大瀧 徹也 「戦争と社会」コメント 2003年11月、日本史研究会大会近代部会 立命館大学◇「攘夷の志—新島襄をめぐる」5月、聖公会歴史研究会◇「長谷川良信とその時代」6月、淑徳大学社会福祉学会

■著作・論文など

岩崎まさみ 「次世代のための資源管理：カナダ西部極北地域における海洋資源共同管理」、2003年12月、『国立民族学博物館調査報告』46号◇「文化と商業のはざまで」3月、第18回北方民族文化シンポジウム報告、北海道立北方民族博物館

追塩 千尋 「叡尊と葉室定嗣及び浄住寺」3月、『北海学園大学人文論集』第26・27号

桑原 俊一 「シュメール文学概説—冥界に関わる作品(1)—」3月、『北海学園大学人文論集』第26・27号

郡司 淳 『軍事援護の世界』(単著) 3月、同成社◇我孫子市史編集委員会近現代部会編『我孫子市史 近現代篇』3月、我孫子市教育委員

会、分担執筆項目：「第三章第三節 日清・日露戦争の下で」、「第八章第一節 動員の記録」

常見 信代 「スコットランドの‘ノルマン・コンクエスト’(3)—王権と辺境地帯との関係をとおして」3月、『北海学園大学人文論集』第26・27号

テレント・アイトル Relationship Between Man and Nature: A Hermeneutical Approach to Interpreting the Affective Thinking of the Mongolian People *INNER ASIA* Volume 6 Number 1, 2004. The Mongolia and Inner Asia Studies Unit, UNIVERSITY OF CAMBRIDGE.

徳永 良次 「高山寺蔵『禅上房書籍欠目録』の書き入れについて」3月、『北海学園大学人文論集』第26・27号

中川かず子 「日本語学習書に見る文法教育観—比較文化的、歴史的概観」、3月、『北海学園大学人文論集』第26・27号

安酸 敏眞 「H・リチャード・ニーバーのアメリカ文化論」2月、『聖学院大学総合研究所紀要』第28号◇「ニーバー兄弟とアメリカ」3月、『聖学院大学論叢』第16巻第2号

Kirkwold, L. (2004, January). Issues in Course Development and Testing: An Eigo Course Evaluation at OUC. LANGUAGE STUDIES ‘dai’ 12 ‘ban’ pp. 15-21. (Study also available as ERIC document ED478018 titled “Issues in Course Development, Evaluation, and Testing: A Case Study from Japan”)

Sellwood, J “The ‘Niceness’ of Belonging.” A critical review of Irene Gammel, ed. Making Avonlea: L. M. Montgomery and Popular Culture. University of Toronto Press 2002. *Jinbun Bunka Ronshu* (March 2004) 173-181.

大瀧 徹也 「特別講義 歴史とは何か 集いの総括」2003年12月、『歴史研究』第13号、日本聖公会歴史研究会 51—68頁◇「情報保存の現在(いま)—未来への扉」第1回、1月、『月刊IM』2月号、社団法人日本通信画像情報マネジメント協会 12—18頁◇「情報保存の現在(いま)—未来への扉」第2回、2月、『月刊IM』3月号、社団法人日本通信画像情報マネジメント

ト協会 17 - 24 頁◇『日本の公文書館』3月、
『公文書館研修講義概要』独立行政法人国立公文
書館 1 - 17 頁◇『我孫子市史 近現代篇』3
月、監修執筆、我孫子市教育委員会
B5版 779 頁◇「証としての記録一知の遺産を
生かすため」3月、『沖縄県公文書館紀要』第
6号、沖縄県公文書館 1 - 13 頁◇『週刊朝日
百科 95 新訂増補 日本の歴史 日清・日露
戦争』4月、責任編集執筆、朝日新聞社◇『週刊
朝日百科 102 新訂増補 日本の歴史 現代
庶民生活の原型』5月、責任編集執筆、朝日新聞
社◇『戦争と死をめぐる位相』7月、『日本史研
究』501号、日本史研究会 207 - 214 頁

■講演

追塩 千尋 「親鸞と浄土教」3月20日、瑞正寺
◇「親鸞と聖徳太子」3月21日、瑞正寺

土屋 博 「設立趣旨説明とテーマ解題」3
月、北海道宗教情報フォーラム設立記念公開シ
ンポジウム（「葬儀と宗教一かかった費用はどこ
へ行くか」）、かでる2.7◇「司会と総括」6
月、日本学術会議公開シンポジウム（「いのちと
こころ一宗教の視点から」）、日本学術会議講
堂◇「旅と宗教一パウロが歩いた古代地中海世
界一」6月、第28回地中海学会大会記念講演、
北海学園大学

中川かず子 「地域における日本語教育ネット
ワークと国際交流」、3月、JAFSA 北海道支部
例会、北海道大学学術交流会館

船岡 誠 「沢庵の禅の世界」2003年12月、
駒沢大学仏教学会公開講演会

大瀧 徹也 「地方公文書館の課題と使命」4
月、中国上海市◇「新撰組残英」、5月、京都平安
ロータリークラブ

■評論・エッセイなど

土屋 博 「北海道 YMCA 創立記念日の意
義」2月、北海道キリスト教青年会『YMCA』
第540号◇『新共同訳・聖書事典』（分担執筆）3
月、日本基督教団出版局

船岡 誠 「圧力に屈しなかった三代将軍の
『師』」、「権力におもねらない林下の気概」、「剣

豪・柳生宗矩に見る禅と武道」、「円相」、3月、
週間朝日百科・仏教を歩く23『沢庵と「武士道」』、
朝日新聞社

安酸 敏真 「丘の上の町(a city upon a hill)」、
3月、『緑信叢書』（聖学院大学宗教センター）
30

Kirkwold, L. (March 31). Mixed Messages
from Canada during the Summer of 2003.
JAPAN-CANADA SOCIETY HOKKAIDO
NEWS 'dai' 19 'ban'

■その他

宝利 尚一 第28回地中海学会大会（6月26
日 - 27日、北海学園大学）準備委員長として大
会を準備。6月26日地中海トーキング「温泉・
テルメ・ハンマーム、いやしの空間」の司会を
務める。

大瀧 徹也 「追悼池田英俊先生」3頁、「人間
とは何か」を考える」8頁、3月、『北海学園大学
学報』第55号、北海学園大学◇「日本のキリス
ト教一ミッション・スクールの虚実一」（鈴木範
久との対談）3月、『立教学院史研究』第2号、
立教大学立教学院史料センター 137 - 177 頁
◇「池田英俊さんの世界」3月、『人文論集』北
海学園大学人文学会◇「地方档案館の課題と使
命」4月、『面向未来的城市档案館国際学術研
討会』中国上海市档案局、上海市档案館主弁 3
 - 7 頁◇「前衛と後衛の間一菱川善夫にみる歌
のありか断章一」6月、菱川善夫『美と思想一そ
の軌跡一』沖積舎、121 - 123 頁

■学位取得

須田 一弘 博士（農学） 鹿児島大学 学位記
番号連論第63号 3月15日、提出論文「パプ
アニューギニア・クボ集団における生計維持活
動の平準化メカニズムと社会変化に関する生態
人類学的研究」

〈日本文化学科〉

・指導教員 菅 泰雄

◎岡 村 大 輔「オカマの言葉づかいに対する考察」

工 藤 亜沙子「暦と年中行事、その中の正月」

野々原 康 雄「死語の研究」

深 瀬 直 人「「差別語」といわれる言葉について」

☆山 崎 美 恵「内と外にみるアニミズム的要素」

貝 沼 みゆき「『覚醒』(創作)」

・指導教員 徳永良次

◎安 倍 由 起「源氏物語からみた服装の色彩」

井 出 麻紀子「漢語・外来語の歴史と現在」

仙 石 結 香「数学と言語学の共存」

武 田 渚「歌詞のレトリック」

田 中 奈 穂「絵本と子ども」

☆北 風 祐 子「現代日本語における助詞についての一考察」

木 幡 顕 行「芥川龍之介」

廣 瀬 英 恵「MR.CHILDREN」

山 下 智 広「現代日本語のアспект」

・指導教員 中川かず子

◎伊 藤 朝 子「韓国における若者の対日観」

大 嶋 貴 子「日本語における「いく」と「くる」」

大 場 和 信「日本人とコミュニケーション」

河 原 由香里「「伝え合う力」の育成をめぐる」

金 明 勲「日本の小学校における外国人児童の受け入れと日本語教育」

松 島 宏 美「動機づけを高めるための考察」

☆小 椋 ゆ き「「聞くこと」「話すこと」」

小 林 美 香「日本語の中の女性語という存在」

武 越 道太郎「程度副詞「結構」についての考察」

宇津木 奈美子「「ようだ」と「らしい」に関する一考察」

坂 本 幸 恵「副詞の分類について」

・指導教員 大谷通順

◎谷 口 紀美子「東南アジアにおける華人のアイデンティティについて」

長 田 恵利子「日本における『三国演義』受容形態の変化」

・指導教員 小野寺静子

◎安 達 千 絵「額田王論」

池 石 麻 衣「対照的な染色材料」

内 山 千 穂「万葉集にみられる「黄葉」の表現について」

宇 山 依 里「行幸歌から読み取る山部赤人の作風について」

倉 本 千 絵「笠女郎の悲恋」

幸 山 愛「防人歌と家族愛」

田 中 美 輝「山上憶良」

種 田 真樹子「安騎野のうた」

細 川 かほる「万葉びとにおける月の役割」

松 井 洋 明「大伴旅人の「亡妻挽歌」について」

森 円 香「大津皇子の謀反の真相」

・指導教員 千葉宣一

◎木 戸 直 樹「佐藤友哉研究」

根 本 彩「『大菩薩峠』机龍之助論」

野 崎 宏 子「文学の中で生きるオオカミ」

長谷川 幹「北 杜夫論」

林 加奈子「寺山修司」

☆高 橋 真 樹「夢野久作」

・指導教員 テレント・アイトル

◎中 川 つかさ「在日者にとつての日本語という生きる場」

若 林 孝 明「越境」と李良枝」

☆中 館 潤 弥「表現と抵抗」

松 井 留美子「日本語によって旅する作家」

矢 野 照 文「『葉隠』を読む」

・指導教員 野坂幸弘

◎安 賢 淑「三浦綾子文学の魅力について」

石 野 紀 子「吉行淳之介」

伊 藤 健一郎「宮部みゆきの作品における深川の役割と、作品の根底に流れるテーマについて」

尾 形 明 人「川端康成のノーベル文学賞受賞と化かされた阿呆」

中 村 志 野「宮澤賢治の童話」

長谷川 賢 祐「安部公房論」

藤 井 香奈子「『野菊の墓』論」

室 崎 秀 樹「説話的作品『桜の森の満開の下』について」

山 口 香 代「小林多喜二論」

☆照 元 香「坂口安吾論」

・指導教員 菱川善夫

◎池 上 真 代「ある夭折歌人について」

岩 寺 萌「斎藤史論」

館 岡 文 絵「寺山修司の少年性」

寺 林 香 織「『みだれ髪』と与謝野晶子の恋愛観」

中 川 景「羅生門」

中 川 さおり「長野まゆみが宮沢賢治から与えられたもの」

丸 本 康 允「「神」の行く先について考える」

宮 崎 富 子「近世の俳諧と漢詩文」

森 明 香「北海道、帯広が中城ふみ子の短歌に与えた影響について」

柳 沢 美 穂「宿命を背負った歌人・中城ふみ子」

佐々木 光 康「塚本邦雄初期歌集論」

山 森 奈美子「少年 傷付きやすく、」

☆宇 山 照 江「与謝野晶子「女性地位向上と文学」」

菅 野 有 沙「「意志」する《人》」

高 橋 真「卒業制作～短歌をヨム～」

吉 岡 奈保子「生きることの意味」

・指導教員 村山 出

- ◎植 木 千 晴「華麗なる万葉の才媛 額田王」
江 口 菜穂子「万葉集 衣に託された想い」
笠 井 美由紀「宮廷歌人としての柿本人麻呂」
今 知 佳 子「高橋虫麻呂」
池 連 玉「高市連黒人」
鈴 木 博 子「近江荒都歌論」
高 久 美 香「山部赤人」
渡 辺 衣 香「高橋虫麻呂」
☆内 山 美菜子「大伴坂上郎女の怨恨歌」
久留宮 裕樹子「山上憶良と子ども」

・指導教員 池田英俊

- ◎家 入 一 桜「倉田百三の文学と近代的自我」
佐 藤 賢「平田篤胤の思想と仏教」
佐 藤 義 算「暁烏敏の行動に対する考察」
杉 澤 真 理「中山みきの人物像をめぐる課題」
山 本 順「史料から見る西田幾多郎の人間像」
☆高 山 雅 敏「岡本かの子にみる人間と文学と信仰」

・指導教員 追塩千尋

- ◎木 村 岳 彦「古代における日朝交流」
小 崎 育 美「絵師・絵仏師の存在と意義」
合 田 美智子「今昔物語集巻二十七の考察」
柴 田 奈 美「源頼光」
多 田 博 美「平安時代の化粧」
鴫 田 真 紀「平安女性の美意識」
永 井 信 吾「郡司による在地支配」
☆富 樫 久美子「平安当時の庶民の葬式」
増 田 寛 之「中世初期の合戦の特質」

・指導教員 大瀧徹也

- ◎加 藤 育 野「吉田松陰私論」
高 田 顕 人「余暇生活の虚実」
中 道 智 彦「北海道の鉄道」
三ッ野 寛 人「失われた古刀」
☆坂 野 克 子「九条武子の生と死」
佐 山 将「ニシン漁で栄えた上ノ国」
鈴 木 真理子「従軍看護婦の相貌」
関 口 勇 次「囚人の暮らしと扱い」
日 高 暁 子「北海道の公娼」
宮 下 友 徳「ある網元の記録」

・指導教員 船岡 誠

- ◎梅 澤 真 悟「高尾山」
北 野 恵 美「茶祖・村田珠光の実像に迫る」
坂 口 千香子「史料に見る戦国期の女性の姿」
新 山 真 吾「長宗我部元親」
橋 本 麻希子「空也の生涯と叡山受戒」
福 岡 大 樹「大岡忠相の実像と虚像」
藤 波 陽「鉄砲の普及と長篠の戦い」
木 村 友 香「上杉三郎景虎の生涯」

・指導教員 大石和久

- ◎安 藝 百 代「映画『ピンポン』徹底研究」
太 田 希 美「映像化不可能と言われたファンタジーの名作 THE LORD OF THE RINGS」
川 路 もも子「ピクトル・エリセ」
菅 野 健二郎「「勝者の思考法」を解析する」
菊 池 甲「「恐怖」と「狂気」の表現にみる映画の価値」
土 屋 知「映画から見える「希望」という言葉」
寺 田 幸 治「原作との比較と映画における在日韓国人の表象」
西 潟 聡「『理由なき反抗』とジーンズのかかわりについて」
前 田 史 織「イラン映画に見られる子供のイメージ」
水 森 禄 子「踊る大捜査線」
村 上 辰 徳「戦争映画の創造性の在りかたに関する考察」
吉 野 修「映画を用いた視聴覚教育の効果」
田 島 友 晴「ジブリ映画における「魔女の宅急便」の特殊性」
島 村 芳 江「映画への愛から導き出される淀川美学の形象とは」
☆稲 川 雅 之「東西アクション映画比較論」
中 山 元 史「『少林サッカー』の魅力」
市 橋 圭 介「男！ 高倉健。」

・指導教員 須田一弘

- ◎荒 川 昌 子「接客時におけるコミュニケーション」
池 嶋 邦 彦「魔女狩りの狂気」
岡 市 早 苗「結婚・結婚式と社会について」
川 村 真 彦「ボディビル」
近 藤 真 弓「古いと日本人の心の考察」
佐 藤 貴 至「外食文化の発達について」
杉 本 学「博物館の歴史と博物館に於ける社会福祉」
高 澤 直 哉「復讐の倫理」
永 岡 正 志「魔術」
根 本 有紀子「猫」
荒 奈津子「近年の日本サッカー・Jリーグについての考察」
☆岩 田 考 礼「畳とは何か」
近 藤 泰 人「チューニングの世界」
佐々木 雄 介「人はメッセージに何を求めるか」
下 山 勲「人はなぜ戦うのか」
永 森 真 樹「児童虐待の現状について」
岡 林 憲「カミのいる場所を探して」
及 川 裕 子「現代における自宅出産についての一考察」

〈英米文化学科〉

・井上ゼミ

熊坂麻妃 「チャータースクール」
佐々木健児 「ゆうばり映画祭がもたらした変化と影響」
白田隆史 「中田英寿」
瀬能正 「異文化を越えて」
寶田恵利 「異文化接触の現場を訪ねて」
滝本広太 「世界の子供に与えた影響」
伝住亜由未 「日本の大学の教室空間」
徳本美智子 「バリアーを越える『五体不満足』」

奈良亜樹 「未知な世界への挑戦」
畑中潤子 「異文化での障害児教育」
横島光朗 「ディズニーランド日本上陸」
高見統子 「「異文化」を乗り越える“おそどまさこ”の特徴」

・岩崎ゼミ

朝鳥いづみ 「食のシンボリズムについての考察」
佐々木智志 「ノーマライゼーションのあり方」
川崎朋子 「身体運動の心理的特性とその効果」
高橋立樹 「現代の沖縄社会と文化」
中村友紀 「本を読むという行為」
七尾沙由里 「普通教育+障害児教育=統合教育」
林 茉美 「ボーダーレス社会における子どもの遊びの変化」
平清水卓也 「相撲の人類学」
山口真利恵 「白老町の観光地としてのスタイルの変化」
高野伊都子 「江別市のレンガと市民の関わり」
渡辺輝人 「現代日本社会における男女平等の特徴」

・川上ゼミ

櫻庭洋希 「ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ論」
氏家香菜 「ハーディの詩の世界」
佐藤夏水 「Christina Rossetti の研究」
山崎明菜 「Thomas Hardy の *Tess of the D'Urbervilles* を考察して」
柴田つばさ 「エミリー・デクキンソン論」
加藤里香 「アルフレッド・テニスンとアーサー王伝説作品について」
市河さやか 「自然神秘思想に達した過程」
渡辺亜希 「ロビン・フッドについて」
川村沙織 「トマス・ハーディの生涯と、作品からうかがえる思想」
鈴木健太郎 「トマス＝ハーディ論」
一戸明子 「映画からみるマザー・グース」
菊島奈央 「出稼ぎ女の悲しい物語」
内藤司 「表現者シェリーの詩と、その有効性を再考する」
横山大樹 「*The Lady of Shalott* と音声が作り出す空間」

・桑原ゼミ

九十三 茜 「ワインについての考察」

岡林大輔 「「生」と「死」そして生きる喜び」
宮川雅弥 「ニーチェのキリスト教批判」
高根愛美 「ギリシア神話の美術表現」
笹谷佳世 「パウロの宣教と罪の歴史」
山崎麻美 「キリスト教における男女の性と愛」
手代木亜弓 「罪について」
小田島知幸 「自然の秩序の中の神」
小林素羅 「キリスト教における悪魔」
上坂瑞穂 「豊穡神話と女神」
前田由香里 「日本のクリスマスと欧米のクリスマスにまつわるもの」
土井さなえ 「魔女とキリスト教」

・竹内ゼミ

阿部友哉 「日本の薬害エイズ」
新敷里美 「環境ホルモン」
伊藤絵里 「先天性疾患について」
太田圭 「日本のダイオキシン類と廃棄物処理の問題について」
小日向茂夫 「町工場の再編と復興への課題」
佐々木智恵 「遺伝病と出生前診断」
佐藤究 「クローン技術の現状について」
清水哲也 「脳死」
白鳥亜矢子 「ゲノムと医療の関わり」
武田安澄 「エイズについて」
坪川美麗 「Hereditary Disease and Prenatal Diagnosis」
柳谷純平 「オランダの安楽死についての考察」
山内友晴 「大麻の鎮痛効果」

・土屋ゼミ

稲荷若奈 「朝鮮のキリスト教」
中村俊哉 「革命後のイランイスラム共和国の変容」
湯浅恵 「現代人の生と死の問題」
山恵星 「日本のクリスマス」
後藤祐 「歴史から見るアメリカ宗教」
澤口綾乃 「宗教と現代医学」
四戸晴子 「現代アメリカの宗教と民衆文化」
山本恵美子 「イスラムと近代性」
富田晃範 「キング牧師とマルコムX」
柴田麻衣子 「儒教に見る韓国の歳時習俗」
山田友香 「ブラジルにおける日系宗教」
吉川美穂子 「国家神道とアメリカ占領政策」
佐藤幸 「タイの社会と宗教文化」

・常見ゼミ

泉美穂 「イギリスにおける「植物帝国主義」」
窪田譲 「キャロライン王妃事件」
熊本藤香 「イギリスの多文化教育」
佐藤早貴美 「「家庭生活の模範」と「帝国の母」」

- | | | | |
|--------------|--|---------|---|
| 谷 口 暢 拓 | 「ジェントルマン資本主義論」 | 前 塚 美智子 | 「Newspaper English」 |
| 浜 桐 健 一 | 「レヴェラーズ運動の基本的性格とその衰退過程をめぐって」 | 島 田 大 輔 | 「Music and Song in Language Learning」 |
| 福 井 好 | 「ヴィクトリア朝時代のガヴァネス」 | 藤 塚 麗 子 | 「Playing With Words in Mother Goose Nursery Rhymes」 |
| 斎 藤 智 | 「『ザ・タイムス』の誕生」 | 齊 藤 一 哉 | 「Teaching English Listening Comprehension」 |
| 石 井 恵美子 | 「アイルランドの伝統音楽とゲーリック・リーグ」 | 大 迫 奈保美 | 「The language of requests: "Could you..." and "Can you..."」 |
| 石 田 桃 子 | 「誇り高きミドルクラス」 | 渡 邊 奈々子 | 「New York Dialect in Woody Allen Films」 |
| 奥 泉 美保子 | 「ヴァージニア・ウルフ」 | 影 山 雄一郎 | 「Motivation in L2 Learning」 |
| ・宝利ゼミ | | | |
| 秋 田 洋 輔 | 「EUの将来像を考える」 | | |
| 阿 部 友 樹 | 「欧州の鉄道・航空事情」 | | |
| 遠 藤 甲 太 | 「イラク戦争を巡る米欧対立」 | | |
| 川 口 陽 子 | 「フランスの女性」 | | |
| 黒 田 あさ美 | 「低迷するドイツ経済」 | | |
| 源 光 瑠 美 | 「進化するIT社会」 | | |
| 小 林 誠 | 「欧州の知識・経済戦略」 | | |
| 佐々木 相 美 | 「フランスの移民問題」 | | |
| 新 海 千 代 | 「ヨーロッパの職人」 | | |
| 鈴 木 啓 子 | 「誰もが人間らしく生きる社会をめざして」 | | |
| 高 田 友 香 | 「文化の中の服飾」 | | |
| 竹 澤 功 | 「グローバリゼーションの正体」 | | |
| ・安武ゼミ | | | |
| 松 原 由 紀 | 「～女性と子供を救うために～」 | | |
| 高 橋 和 也 | 「米国黒人奴隷制と黒人文化」 | | |
| 角 卓 郎 | 「禁酒法成立とアメリカ社会」 | | |
| 清 野 博 子 | 「アメリカ史の中の、トマス・ジェファソンとその影響力」 | | |
| 増 田 有紀子 | 「マルコムXとキング牧師」 | | |
| 細 矢 浩 樹 | 「アメリカの黒人解放運動の歴史」 | | |
| 橋 田 晃 | 「アフリカン・アメリカン黒人の歴史」 | | |
| 村 上 貴 樹 | 「アメリカ合衆国の1924年移民法」 | | |
| 津 坂 広 大 | 「アメリカを変えた13年間ー禁酒法」 | | |
| 前 寺 歩 | 「移民史について」 | | |
| ・米坂ゼミ | | | |
| 三 川 静 江 | 「Linguistic features and national identity of Australia」 | | |
| 須 藤 睦 | 「Slang: The Environment and History of Slang」 | | |
| 野 崎 広 輔 | 「The Writing Class in Japanese Senior High School」 | | |
| 兒 玉 響 子 | 「Making Recommendations: The Language of Salespeople」 | | |
| 江 州 華奈子 | 「American Sign Language」 | | |
| 矢 形 宏 紀 | 「Sound Changes in Spoken English」 | | |

編 集 後 記

21号をお届けします。今回は、日本文化学科の研修旅行の特集なのですが、出発当日が猛吹雪で一日延期（日程短縮）となりました。そのようなアクシデントにも関わらず、研修の成果は大いにあがったようです。詳細は、旅行記をご覧くださいと思います。この記事以外にも多くの学生さんから、様々な感想が寄せられていました。

（徳永良次）

この春、縁あって埼玉県聖学院大学から本学の人文学部英米文化学科に移籍してきました。北海道は高校時代以来の憧れでしたが、ようやく夢が叶って嬉しく思っています。わたしの母校は米子東といって、嘗ては甲子園でも活躍した文武両道の高校ですが、その校歌の一節に「故きを温ねて新しく……」とあります。いわゆる温故知新ということですが、わが学部が高く掲げている「新人文主義」の理想は、この精神を崇高な学問理想にまで高めたものといえるでしょう。この理想の実現のために微力ながらも努力したいと思いますので、何卒宜しく願いいたします。

（安酸敏眞）

人文フォーラム21：2004年8月5日発行 編集人：徳永 良次、安酸敏眞 発行人：桑原 俊一
発行：北海学園大学人文学部（札幌市豊平区旭町4丁目1-40、TEL 011-841-1161） 印刷：（株）アイワード



幌平橋より札幌市中心部を望む。